

# おかげさまの気持ち

山谷えり子



伊勢神宮への参拝者が今年は千三百万人に達すると予想されてゐる。国民の十人に一人にあたり、日本民族の集団的ともいへる記憶が鮮やかによみがへつてゐるといへよう。

十月二日、皇大神宮(内宮)における、第六十二回神宮式年遷宮の「遷御の儀」に参列し、厳かな秘儀を奉拝させていただいた深い感動は、今も私の体を包んでゐる。

今回、安倍総理と八人の閣僚、十人の国会議員が参列したが、総理としては、戦後初の参列であった。今回の遷宮祭は、平成十七年の山口祭を嚆矢として八年の歳月を費やし、心をこめて準備されたことを思ふにつけ、二十年に一回の式年遷宮を千三百年間続けてきた日本民族のありやうがまことに無比なものであることが得心される。

遷御の儀の夕、午後五時頃より、神宮の杜の中に身を置き、太古よりの時空を、先人たちの思ひに抱かれるやうに過ごせたのは至福であった。神儀が出御される正八時、天皇陛下には、宮中で神宮を御遙拝あそばされると承り、そのお姿に思ひを馳せつつ、祈りの心で紡がれてきた国の姿、すなはち天照大神が孫の邇邇(よよ)芸命に託された三大神勅「天壤無窮の神勅」「宝鏡奉斎の神勅」「齋庭の稻穂の神勅」が今日もありありと存在し続けてゐる奇蹟に

感謝した。神代と今日がこのやうに瞬間のうちに結ばれるやうな国の姿は他にない。

神気に満ちたお白石上でかしまれる臨時神宮祭主・黒田清子様のお姿は、時とともに、清浄な白さがいや増していくやうに思はれた。浄壇の中、白い行障、絹垣に囲まれた神儀が、目の前を新宮へと向かはれる折、やはらかな風が神宮の杜を大きく吹き抜けるのを感じたときには、西行の歌「かたじけなさに涙こぼるる」の思ひが乗り移り、体ごと揺さぶられる思ひがした。まことに神代と先人、自分が一つになるといふ常若の国の秘密の淵源を見る思ひであった。

七年後の東京五輪招致決定で流行語になった感のある「おもてなし」といふ言葉であるが、この言葉の源流には、道を求める文化、惟神の道があるのでないだろうか。神々の御神徳によって私たちの、もったいなくも生かされてゐる「おかげさま」の気持ちだが、「おもてなし」の心となって発露されてゐるのではないだろうか。

人間は伝統といふ縦糸と時代といふ横糸によって生かされてゐる。式年遷宮は、祈りの心をもって働くこと、見えない処にも手を抜かず期限きっちりやりとげる日本人の徳を守り育ててきた。だからこそ、これからも美しい心をつなげ続け、君民一体の国が誇りとし、善をなし徳を積んでいくことが私たちのつとめであらう。

白石を踏み進みゆく我が前に光に映えて新宮は立つ

(平成六年豊受大神宮参拝御製)

(参議院議員、神道政治連盟国会議員懇談会

副幹事長)

# 杜に想ふ